令和４年度 美山中学校学校だより第11号　令和５年２月９日　　発行　南丹市立美山中学校

美山中学校だより

次のステージに向けて全力で

生徒総会の様子

穏やかに経過してきた冬も先月末の強い寒波と大雪に、やはりこの地の冬の厳しさを実感することになりました。停電や断水で不便な思いをされたご家庭も少なくなかったと伺っています。最初の寒波では前日の早い段階で市内全校の休校が決定され、混乱を免れました。翌日には、引き続き休校とする地域がある中、多くの方のご尽力により登校を支えていただき、授業を実施することができました。その後の大雪の影響もありましたが、立春の声を聞き、少し春に近づいてきていることを感じさせる日々です。日頃は、本校の教育活動に格別のご理解とご支援をいただき誠にありがとうございます。

さて、3学期を始業して早1ヶ月、そして卒業式までも約1ヶ月の時期となりました。それぞれの学年で1年のまとめと次のステップの準備に力を注いでいます。とりわけ3年生は、日々緊張感が増す中、希望進路の実現に向けた努力を続けてきました。今後、私立、公立前期、公立中期と自らの進路を切り拓くチャレンジが続いていきます。これまでの努力を生かすため、まずは試験の場に立てるように健康管理に努めてほしいと思います。時節柄、ご家族も気を遣われると思いますが、ともに支えていただきたいと思います。3年生が頑張っている雰囲気を、1・2年生も感じながら日々を過ごしています。どのように目標に向かっていくかを学ぶ機会にもなり、次のステージの準備にもなっています。

3年生 土曜学習講座

社会を明るくする運動作文コンテスト　更生保護事業協会長賞

『「やり直し」が認められる社会へ』

3年　安野　藍里

この社会に犯罪がなくならないのはなぜだろう。普段、ニュースや新聞で数多くの犯罪が報道されている。それはきっとニュースや新聞に載りきらないほどだ。私はそれらを見るたびに、「なぜ罪を犯してしまうのだろう。」「罪を犯すまで何がその人を追い詰めてしまったのだろう。」と思っていた。少し調べてみるとこんなデータがあった。

法務省によると、令和元年の日本の再犯率は48．8％と約半数に及び、元受刑者の二人に一人が再犯者になってしまうらしい。かなりの割合だ。一回でも罪を犯すと人生を大きく左右されるのに、二回、三回と犯罪を重ねてしまう人が意外と多いと知った。「なぜ、罪を重ねてしまうだろう。」という疑問のほうが強くなった。

一度は罪を償った人が再犯を起こしてしまう背景には、刑務所から出所後も社会に認めてもらえないことがあると思う。例えば、出所後、また新たに人生を歩もうと覚悟を決めても、前科があるという理由で就職できないこと。また、前科についての噂が流され、誇張され、不審の目を向けられること。「あいつは悪い人間だ。」というレッテルを貼られ、自尊感情も傷つけられてしまい、自暴自棄になり再び犯罪に手を染めてしまうことがあるのではないか。もちろん全ての再犯がこうではないと思うし、罪を犯すこと自体、許すことができない人々がいると思う。しかし、出所後新たに「やり直し」の一歩を踏み出そうとしている人間が、過去の行いやイメージによって、現在の自分を見てもらえずに苦しんでいるということを、私たちは認識する必要があると感じた。

現代の情報社会も前科のある人々にとって生きにくい環境であると思う。インターネットは気軽に何でも調べることができる。名前を検索すれば、関連する記事を見ることができ、前科についての記事も発見することができるだろう。社会に出て、きちんと生活を送っていても、何かのきっかけでその記事が発見されると、その人へのイメージが覆されてしまうことがあるかもしれない。刑期を終えてもインターネット上で常にさらされ続け、新しい生活を送るうえでの障害になっている。

このようなことから「やり直し」が認められる社会になるためには、一人一人が今、目の前にいるその人の頑張りを素直に認めること、理解すること、応援したり支えたりすることができる人間関係が必要だと思う。そして、出所後の人たちを支える活動をしている「保護司」という人たちがいるのを知った。保護司の方はボランティアで犯罪や非行をした人に対し、正しく指導し生活上の助言や就労の援助などを行い、その立ち直りを助ける存在である。前科のある人にとって、自分を理解し、援助してくれる存在はすごく大きいと思う。

私は中学校で剣道部に所属していた。ある時、急に向かい合っている相手が怖くなり、自分の技がうまく打てず、徐々に剣道をするのが嫌になっていた。練習のたびに「楽しい」とも思えなくなっていた。しかしそんなとき、周りの仲間、先生、家族が私の気持ちを理解し「一緒に頑張ろうよ。」と背中を押してくれた。自分のことを理解してくれる仲間と剣道ができることが楽しくて、また稽古を頑張れるようになった。夏の大会前に怪我をした時も、日々の練習に参加できず遅れをとった。しかしその時は、「前、つらかった時に支えてもらったのだから、今度は私がみんなを支える番だ。」と思って自分にできることを探して頑張れた。他にも振り返ってみると、私はあらゆるところで、いろんな人に支えられてもらっていたし、だから今の自分があるのだとわかった。自分を理解し、支えてくれる、助けてくれる存在がいることは生きていくうえで心強いなと気づいた。

犯罪が起きないことが一番大事であることは理解している。しかし、様々な事情で罪を犯してしまった人がいて、また、「やり直したい」と努力している人がいることも事実だ。つらいときに自分を支えてくれる存在、理解してくれる存在がいるかどうかはとても大きい。自分の思いを理解し、支えたり応援したり、自分と向き合ってくれる人とのつながりがあると、未来に希望をもって生きていくことができると思う。普段から「目の前」の人の気持ちを思いやり、しっかりと向き合って、ともに生きていける人間に私はなりたい。

＊安野さんは、小論文グランプリA分野でも入選しています。